

## 館蔵資料紹介 No.17

## 『岐阜県農家副業写真資料』について

荒幡 克己

本学農学部の前身、岐阜高等農林学校は、大正13年に設立された。こうした経緯もあって、大正期から昭和初期にかけての農業関係資料の中には、かなり貴重な史料が残されている。図書館一階には、旧岐阜高等農林学校の資料コーナーが設けられ、当時の蔵書が相当量保存されている。

これに加えて、幾人か、創設当時の関係者の貴重な個人的蔵書も寄贈されて、それぞれ個人名が冠せられた文庫として保存されている。これらのうち、筆者の専門とする農業経済、農業経営関係の史料としては、東海林文庫、山益文庫に幾つか貴重なものがある。



旧岐阜高等農林学校所蔵史料については、和書に関しては、本学創設期の時代性を反映し、戦間期のものが中心となっている。洋書に関して

は、当時本学関係者を初めとして多くの有為ある研究者が官費留学生として渡航し、帰国時に、海外での研究成果とともに洋書を持ち帰ったので、これらが本学所蔵となったものが多くある。

洋書の中に、学術的にも貴重なものが多く含まれていることはいうまでもない。特に、分野としては、農村社会学の蔵書に多くの貴重な文献がある。これは、岐阜高等農林学校校歌の作詞者として知られている鈴木栄太郎氏が、農村社会学を専門とし、氏の研究活動によって自ずとこれらの分野の文献が集まったことによるものと考えられる。鈴木氏は、日本における農村社会学の黎明期にあって、その草分け的な存在であり、とりわけ、フランスの農村社会学の日本への紹介に関して第一人者であった。このため、洋書の中でも特にフランスに関するものが多い。

学術的な価値もさることながら、古書市場での市場価値として極めて高いものも幾つか散見される。特に、イギリス農業革命の創設者として知られるアーサー・ヤングの旅行記等の著作は、かなりある。例えば“Sixth Month Tour through the North England”,

(1770), “The Farmers Tour through the East of England”,(1771), “Travels During the Years 1787”, (1787), などである。

これらは、いずれも本国イギリスにおいても、希少価値が高いものであり、相当な取引価格となっている。何故これほど貴重なものを当時の日本人留学生が入手できて、現在のように本学図書館に所蔵されるに至ったかは、大変興味深いのが、当時の経済情勢を考えると、それなりに頷くことができるであろう。

即ち、本学創設の頃、大正末期から昭和初期にかけては、ヨーロッパは第一次大戦で疲弊し、特に1929年からの世界恐慌はこれに追い討ちをかけた。この時、各国は、競って自国通貨の切り下げに走り、デフレスパイラルの様相を呈していたのである。こうした状況では、日本から持っていった日本通貨の価値が高くなって、比較的潤沢な資金の下で、暴落したアーサー・ヤングの希少本などが手に入りやすかったものと考えられる。

さて、洋書に関する所蔵本に、このようにも興味深いものが多いが、以下では、筆者が専門とする日本の農業史、農政史に関するものに焦点を当てて、和書を対象として、所蔵本の中から、貴重な蔵書の内容とその背景について紹介する。

当時の農業経営を巡る事情としては、第一に副業の奨励を挙げておくべきであろう。明治末期から農政課題として登場した「農家副業の奨励」は、貨幣経済に巻き込まれる中で、農産物価格の変動や低迷に直面し、多くの農家が貧困から脱し切れなままであった実情に対処すべく、農家の現金収入の道を開く方途として、取り組まれるようになったものである。

当時の農政課題の中で最大の懸案は、何といても地主の搾取の下で抑圧された小作の経済的救済と権利関係の民主化を課題とする「農地制度問題」であった。そして、もう一つが、「米価問題」であった。これらの影に隠れて、「副業の奨励」政策の位置づけは、決して最優先の課題とはならなかった。しかし、農地制度問題にしても、米価問題にしても、その根は深く、容易に解決できる問題ではなかった。これらと比較して、「農家副業の奨励」は、比較的

取り組み易く、効果も短期間のうちの眼に見えるようになる、いわば即効性のある政策であった。

副業の奨励は各地で取り組まれたが、その実態は、断片的な資料が郷土史等に散見される程度であり、今日となつては意外にも不明なままになっているところが多い。農地制度問題や米価問題が多く研究者によって取り組み、またその資料も比較的よく保存されているのと比べれば、体系的な資料の収集と保存は、なされているとは言い難い。このままでは、未踏査のまま実態が解明されないことになる恐れさえある。

このような背景から見ると、大正期から昭和初期の農家副業奨励の実態を辿る資料は、その希少価値が高い。本学所蔵の農家副業関係の史料は、主なものだけでも30点以上ある。その中から、ここでは、「岐阜県副業写真帖」を紹介する。



昭和10年、岐阜県副業紹介所が編集した、この「岐阜県副業写真帖」は、43の農家副業の方法について、個別具体的に、写真

によって解説したものである。时期的には、副業政策の奨励が始まったのが明治30年代からであり、大正中期までのものが農家副業奨励の前期、大正末期から昭和初期にかけてのものが後期とされているので、農家副業奨励全体から見れば、最末期のものである。全国的に見れば、副業の必要性は、積雪に閉じ込められる農閑期の長さなどからして、主として北日本で緊要であり、温暖な地域ではそれほどではなかったが、農家の収入確保の手段として他に有力がものがなければ、必要性が高くなるものであり、岐阜県もまた、こうした背景があった。

写真帖に載せられている43の副業種類からは、岐阜県の特徴が感じ取れる。筆頭は、富有柿であり、この他、梨、栗、各種野菜、山葵などの農産物とともに、寒天、凍豆腐、干し柿などの食品加工、更に雛人形、木箸、箒、竹細工、木炭などの工芸加工品などが列挙されている。

冒頭に掲げられている岐阜県副業紹介所所長（岐阜県経済部長）、田中進の序文には、「深刻ナル農村ノ不況ニ直面シ、之ガ打開ノ途ヲ講ズルハ、頗ル急務ニ属シ、…農業経営ヲ改善シテ其ノ経営ヲ複雑化シ、単純ナル経営ヨリ来ル勞力ノ不均衡ヲ是正シテ、農閑期ノ余剩勞力ヲ資化シ、以テ収入ノ増加ヲ

図リ、一面勤勉ノ美風ヲ助長スル…」とあって、当時の実情が窺える。

写真は、いずれも生産状況が二枚程度、工程別に示され、更に調製・梱包状況、出荷状況とあわせて四枚程度がそれぞれの副業種類毎に示されている。また、それぞれの副業種類について、取り組みがなされている生産組合等の名称、出荷量、販売額等が最後に資料として挙げられている。

農家副業奨励に関する文献資料は、他の府県でもかなり多くのものがあるが、写真としてほとんどの副業種類を網羅する形で保存されているのは、筆者がこれまで見た限りでは、この岐阜県のものが初めてであり、全国的にも貴重なものと言える。この時期の副業奨励は、かなり戦時色を帯びつつあったものであり、初期のものとはやや様相を異にしている。特に、取り組みが集団的であるところは、初期にはなかった性格であり、写真にも集団的取り組みが映し出されている。とはいえ、加工、販売を重視し、現金収入を優先した方針は、不変である。出荷状況の写真が多いところには、こうした特徴がよく出ている。

なお、この他見るべき史料として付言しておくべきものは、「日本のデンマーク」と言われた、愛知県碧海郡関係の史料である。この時期、日本の農業史上注目すべきこととして、農業発展の目標像に、デンマーク農業が取り上げられた。大正中期、社会全体が、大正デモクラシーの思想的昂揚の下で、自由思想が展開されていたが、その延長として、北欧の小国デンマークへの憧憬が国民的な風潮として高まっていった。この脈絡で、農業においても、デンマーク農業が注目されたのであった。そして、その具体的な姿として、全国に先駆けて養鶏中心の畜産導入等によって経営の多角化を実現した愛知県碧海郡安城周辺の農業が、「日本のデンマーク」として着目されたのである。

「日本のデンマーク」と言われた安城農業の資料、及びその指導者として全国的にも有名を馳せた山崎延吉の著作集等は、安城農林高校及び安城市中央図書館に多く所蔵されているが、本学図書館にも、多数所蔵がある。ちょうどデンマーク農業が注目された時期が、岐阜高等農林学校創設の時期に近く、しかも地理的に近いこともあって、当時の本学関係者も、おそらく安城等を視察するとともに、関係資料を多く収集したことであろう。

（あらはた かつみ：農学部助教授）